

小説 神楽陽子
挿絵 ぼくちん

私立
探偵
高須賀エリカの事件簿

盗犯に陥る危険なホステス



FILE 1 　　＼催淫痴漢車両＼

FILE 2 　　＼真夜中の麻薬市場＼

FILE 3 　　＼電波中毒学園＼

FILE 4 　　＼淫乱美女のカメラ目線＼

006

071

121

171

登場人物紹介

Characters



たかす が
高須賀エリカ

高須賀探偵事務所の所長。魅惑のボディと美貌、そして知性までも併せ持った女性。26才、身長169センチ。前職は婦警、趣味はバイクのスマーカー。



ながさわ
永沢ユイ

名門「L女」に通う現役女学生。将来の夢は婦警になることで、高須賀エリカに憧れ強引に事務所の助手になった。身長155センチ。牛乳を愛飲。

じんぐう じれみこ
神宮寺怜美子

エリカが婦警の際の同僚で、以降付き合いがある。目つきが鋭いため、エリカには「ヘビ子」と呼ばれている。

「逃げる？ ……冗談じゃないわ。ここでケリをつけてやるの」

犯行メンバーの確認は不十分だし、鉄道会社からの依頼では「あくまで秘密裏に」とのことだったが、いかんせん状況が悪すぎる。

最後の手段としてエリカは、車内で大きな怒号を張り上げた。

「さっきからどこを触ってるのよ、あなたたちッ！」

これ以外の乗客が一斉に振り向いてくれるはず。そうなれば痴漢も手を止めるしかないだろう、その瞬間が反撃のチャンス。

「寄ってたかって、私に何を……………？」

ところが乗客たちは素知らぬ顔で、大声をあげる女性に見向きひとつしなかった。

エリカは眉をあげて、両目を瞬かせ、もう一度はつきりと説明するが。

「な……………ちよつと、こいつら痴漢よ？ 痴漢が出たの！」

変わらず反応はない。予想を裏切られた展開に絶句し、猛獣と同じ檻にいるような危機感に身を強張らせる。

（何が一体どうなって……………）

おかしいのは周囲にいる数人だけではない。車内全体が異様な雰囲気包まれ、空気が重い。男の乾いた息遣いが何重も重なる。

ハア、ハア……………ハア、ハア……………

状況に理解が追いつかないエリカは、ロングヘアで首を洗うように車内を見まわし、驚

愕のあまり声を失った。

「ッ!?」

ずっと普通の乗客だと思っていた。だがエリカから離れた位置にいる男たちは、新聞を読みながら、携帯を操作しながら、誰もが醜い逸物を取り出し、人目も憚らず堂々と自慰に耽っていたのである。

ハア、ハア……ハア、ハア……。

すぐ傍の痴漢たちも肉竿を股間にぶらさげ、片手で扱く。

不気味ですらある車内の光景にエリカはしばらく放心していた。

「あ、あ……あな、た、あなたたち……?」

動揺が上まわって冷静な判断ができない。牡に独特のにおいも異常に強く、目に染みるような刺激臭となつて瞬きばかりをさせられる。

快速急行はすでに運転を再開していた。

「——しまったわ!」

まだドアを叩くなどして第三者に異変を報せることはできたのに。それに気付いた時には、すでに駅は遠く、列車は高架線上を走っている。

右腕と左腕をぐいっと別々に引っ張られ、肩が突っ張った。

「うくっ! この……放しなさいよ、変態……ッ!」

痴漢の集団はにやにやと笑うばかりで、女探偵の大的字になった四肢に頬擦りし、汚い

涎をズルズルとすすりあげた。

ひとりの男がハサミを取り出し、切っ先を顔に向けてくる。刃物を首筋に添えられて若干疎みはしたものの、強気な姿勢を崩さないエリカではあったが。

「ち……ちよつとまさか？」

ハサミはブラジャーの肩紐を引っ掛け、裁断する。刃物の使用は脅迫目的ではなく、衣服を裂くためのものだったようだ。

巨乳の重量に屈してブラジャーがぱらりと剥がれる。背中の留め具はそのまま、下着はさながら拘束具のように下乳に食い込んだ。

男どもが寄ってたかって裸の乳房を観察する。エリカ自身「大きい」と感じる、たわわに実った胸の果肉には、牝をにおい立たせる艶があり、黒いライダースーツとの色彩効果でいっそう色白に映える。

重力の働く方向に脂を詰め込んだ乳果は、上はなだらかな、下は急な曲線を描いて、形は半切りレモンのように美しい。列車の揺れに合わせて全体がぷるんと弾む。ニップルは桜色が薄く、水で薄めた絵の具を少しだけ染み込ませたかのようなようだ。

「み……見ないでったら！」

肉薄する至近距離での衆人環視に困惑し、火のついた羞恥心が暴れまわる。異性の視線を意識するほど、見られている、という実感がふつふつと湧き上がった。

肌が火照り、汗も滲む。羞恥と危機感の両方で心臓をけたたましく鳴らし、頻繁に後ろ

を確認する。そうするうちに、赤い髪を肢体から解けなくなった。

腰から上を強く扉に押しつけられ、ガラスの表面で乳房が平らに広がる。

前のドアは冷たくて硬い。

「ひあっ？　こ……このっ、んぐう！」

後ろからは、火照った肉体を執拗に撫でられる感触ばかり無限に伝わってくる。

痴漢の集団は終始無言のままだったが、徐々に息遣いが荒くなった。

ハア、ハア！　ハア、ハア！

あたかもスライドパズルを解くかのように、素早く入れ替わり、女探偵の足元で数人がしゃがみ込む。体格のよい男は獲物の股下に潜った。

開脚せざるをえないエリカの股間近くで、ふたりの男がもぞもぞと動く。女の急所を布越しに這う複数の指に戦慄させられ、顔からさつと血の気が引いた。

「どこを……いい加減に、はあ、しなさいったら！」

だが、どれだけ声を張り上げても彼らは反応すらしない。動揺して髪を振り乱す女探偵とは逆に、焦りも戸惑いもせず、黙々と陵辱の手を進めていく。こちらの声が聴こえてもいない様子である。

ジッパーは股をくぐって末端まで外され、お尻のサイズにしては小さめの、淡い紫色のショーツを引っ張り出された。そこでもハサミが入り、両サイドをカットされて、性毛で恥丘を飾られた三角地帯が裸になる。



「ちよつと、あ……あなたたち」

怒鳴るつもりが、声は尻すぼみに消えて精神力も萎縮してしまう。媚肉の詰まった入り口に、男の顔は十数センチの距離まで近づいて、脂ぎったまなざしを注ぎ込んだ。

日頃からライダーズーツを着用しているエリカの肌は、露出に敏感であり、不特定多数に見られる羞恥の袋小路へと追い込まれる。

それなのに、女の急所がうずうずとしてやまない。

(う……?)

媚肉のクレバスはひくついて、ひとりでに綻び、紅鮭色の入り口を覗かせた。肉体が想定外の興奮状態にあることで、自分を信じきれない不安に駆られる間にも、肉の花びらがまろび出て一滴の雫を滴らせる。小さな快感を閃かせてしまう。

獣どもの鼻息が荒くなった。

「放し、なさいよ……あっんあ？」

触られたのが太腿であっても、さつきより肌は感度を増しており、ボディスーツ越しにも刺激を増幅させる。精神力で食い止めようともし、悦びを知る肉体は、与えられた刺激に正直に反応し、女穴の粘膜に熱い蜜を馴染ませた。

手前で屈む男が、真下に剥がれたショーツを手にとってにおいを嗅ぐ。順番を待つ隣りの男も、女性の下着で鼻を拭いた。

奇怪な行動をおどましく思っ、エリカは恐怖心を募らせる。

(こいつら、どこかおかしいわ……もう、変としか)

この車両の男たちは、女探偵が知る痴漢の行動を逸脱していた。年齢も職業もばらばらの、おそらくは帰宅の際に同じ車両に乗り合わせるだけの連中が、まるで前もって申し合わせていたかのように獲物を辱めるのだ。

椅子に座っている男まで、こちらに見向きもしないのにペニスを取り出し、オナニーを続けている。快速急行の3両目は異常としかいえない空間と化していた。

(いつから始まったの？ 電車に乗る前はどの男も普通に見えたのに……)

飢えた牡の呼吸が薄気味悪い。車内の空気は淀んでいる。

武器の類をすべてユイに預けて無防備に徹したのは、失敗だったかもしれない。

「しまったわ、こんなことなら——つきゃあああ!？」

装備に意識が向いた瞬間の、抵抗の緩みを狙われ、陵辱の手が殺到する。

精神的におかしな状態にある男たちは、エリカの肢体を一齐に担ぎ上げ、妖しい笑みをずらりと浮かべた。気味の悪さに寒気がする。

(早く電車を、ここから出ないと……)

乳房の剥がれたガラスを舐める者までいた。何もかもが理解の範疇を超えている。だが脱出を決めた時には遅く、両腕をベルトで一束にされ、吊り革に固く括られた。

「くっ！ こ、この……っはあ！」

吊り革は何回も巻かれて短くなっており、長身のエリカでも、どうにか爪先が床に届く

厳しい姿勢だ。もはや拷問じみている。

通信機のスピーカーがビリビリと振動した。

『先輩！ 先輩っ？ どうしたんですか、無事なんですか!?』

ユイの声が漏れようが、獣たちは気にも留めない。こちらも大声で応答する。

「ユイ？ まずいわ、列車を——」

こうなつては列車を止めてもらうより他に手はない。ユイは先頭車両に近い2両目の最前列で通信に応えているはず。

『先輩、待つててください！ すぐ助けにいきます！』

「だめよ、あなたの手にも負える連中じゃないわ！ いいから車掌に言つて！」

『え？ よく聴こえませんか先輩、もう一度——』

ところが会話の最中に通信が切れてしまう。こちらのミスでなければ、ユイがまた失敗を仕出かしたのか。

(まずいわ……ユイのことだから、こっちに向かつてきてるのかも)

ユイがこれまでの会話だけで「電車を止める」という最善策を導き出す可能性は、残念ながら非常に低い。この場に武器を持って駆けつけてくれたとしても、彼女ではエリカの二の舞になるのが関の山だ。

姿勢のつらさに早くも節々で疲れが出始めた。

「あくっ？ はあ、はあ……」

列車そのものが、吊るされたエリカをダイレクトに揺らす。ぐいっと両腕を真上に牽引され、車輪がガタンと次のレールに乗り上がるたび、裸の美乳がたぶんと弾む。

八の字に開かされたままの脚では、どうしても踵が床に着かず、無理に伸ばそうとした大腿筋はびりびりと痛いくらいだ。

人の姿をしただけの陵辱者たちは次から次へと、抵抗できない女探偵の成熟した肉体に手を這わせ、肉つきのよい尻頬から太腿はもう何十回と触られた。

「ど、どれだけ触れば……っあふう？」

手前にまわり込んだ連中は乳房をむんずと掴み取り、谷間に親指を押し込んでくる。握力には一切の加減がなく、麓が括れるまでぎゅうつと強く搾られた。

「あっ、んあ……はあっ、そ、そんなにしたら……」

悶え汗がどつと湧いて肌を湿らせ、体温も急上昇する。ふくよかな巨乳はサイズに比例して、一回の搾乳でも数回分の感触が可能で、乳悦は急速に高まった。突き抜ける疼きが強張る肩をくすぐり、心ならずも脱力させる。

「はあっあ、あふうん！」

自分でも信じられない声色の吐息が漏れる。口の中には唾液が浮かぶほど溜まり、呼吸器官は熱を帯びてエリカを苦悶させた。

乳芽がつんとしこり勃ち、搾乳の指と硬く擦れてしまう。

ひとり、またひとりと巨乳を押し揉む男の数が増え、乳膨はさながら大きな餅のごとく

握ねまわされた。乳頭の向きが頻繁に変わり、指の又またに入っただうつ。しこった先端に集中する熱痺が、じりじりと本能を焦らす。

(なん、なの……私?)

満員電車の中央で吊り革に吊るされ、下着を切られて、胸肉を弄ばれて。なのに肉体はもっと欲しいとばかりにわなわなと震え、下の花卉を潤すのである。意志はどうあれ、牝の本性は場所も相手もわきまえず、すべてに浅ましく感じていた。

(こんなところで……こんなやつら相手に、誰が)

エリカ本人は場所も相手も選び、拒絶するからこそ、官能はいつそう強迫的に理性を蝕む。自宅の私室だったならたまたまらず自慰を始めるくらいまで、肉体は過剰に火照って、恥汗でライダースーツを粘着させ、牡を誘う牝のにおいを漂わせた。

手前右の男がちゅうつと音立てて乳首に吸いつく。

「んっあはああ?」

高温多湿の粘った軟体がにゅると絡まり、芯をまっすぐに吸引される。左の突起は中指で小刻みに擦り立てられた。

尖った性感帯に乳悦を叩き込まれ、甘い痺れがざわざわと肌で騒ぎまわる。反射的に身を振っても、吊り革に手首を捻られるばかりで、疲労が大きくなる一方だ。

「はあ、はあ……あっんふあ!」

新鮮な愛蜜で濡れそぼった秘壺には、指を挿し込まれ、花びらの合わせ目に隠れた肉豆

を摘み取られる。痴漢は巧みな指捌きで、ブドウの実を押し出すように薄皮を捲り、刺激に弱いクリトリスを丸剥きにした。

快楽神経の凝縮したそこを集中的にタップされる。

「っあ！ んぁ、そ……そこは、く、あうっ！」

食い止めようのない性感が閃いて、柳腰をぶるつと打ち震わせる。女穴は排尿の生理に似た過熱を始め、とろとろと発情の証を垂れ流した。

甘蜜はライダーズーツと太腿の隙間に流れ込んで、熱とおいを逃さず、濃厚な気配をエリカの服の中にまで充満させる。

（だめ……カラダが、動かないわ……！）

拘束されているからではなく、甘い痺れのせいで四肢を動かせないのだ。

「はあっ、あ……あっ！ しっ、こいわね……んはあ？」

気丈に振舞おうにも、乳頭とクリトリスの三点を同時に弄りまわされては、さしもの女探偵も原始的な性に屈するしかなかった。ライダーズーツを前に開いた、豊満で蠱惑的な肉体を、名も知らぬ男どもに揉まれて悶えるばかり。

いくつかの手は服の裏にも入り込む。ねっとり汗ばんだ肌を直に吟味された。

深紅の髪はねぶられる。普通なら身の毛がよだつところだ、嫌悪感に先んじて蹴りが出てもおかしくはない。

「くう……ッ！ や、やめて……！」

だがエリカは持ち前の強気を維持できず、おぞましい愛撫をすべて感覚してしまふ。
(早く……次の駅はまだなの?)

快速急行は途中の駅を素通りし、次の停車駅まで一直線に向かっている。相当の速度に違いない。しかし列車は遅く、一秒が長く感じられた。

真後ろにいる男がペニスを持ち上げ、先端で尻の谷間を下向きになぞる。

「うっ!? な……まさか」

右肩越しに振り向いて、エリカは瞳を慄か^{おの}せた。黒ずんだ逸物はやたらと大きく、臍の高さまでいきり勃ち、太さは子どもの手首にも匹敵するのだ。腐った茸のようないでたちは目にも汚らしい。

男はにやついて、瘤状に膨れ上がった赤い亀頭を、濡れすぎた入り口に押し当てた。

悪戯程度ではない、もはやレイプだ。

「ま、待ちなさい! あなた……聴こえてないの? 待って、やめてったら……」

かぶりを振って、漆黒のボディに深紅のストリートヘアを巻き上げ、開通を頑なに拒絶する。それでも男たちが止まる様子はなく、抵抗に意味がないことを思い知らされ、声は小さくなっていく。

陵辱者は雄々しく勃起した巨根を、奥の見えない肉壺にずぶりと沈めていった。

ズブ! ズブ、ズブ……ズブズブズブ!

「ああっ! あ……あぐう? はあ、あっ……んはあ!」

膣筒が拡張し、肉棒に熱い粘膜を吸着させる。

これだけ焦らされたうえでの挿入は、エリカの想像を越えてあまりに甘美で、列車の中とわかつていても、声が色めくのを堪えきれなかった。

取り乱す女の抵抗が無力な震えに変わる。

(こんな……変態、に……！)

侮蔑の対象でしかない下卑た男に身体を許してしまう屈辱。せいぜい腰の角度をわずかに変えることしかできず、傍目にはよがって見える。

窮屈ですらある肉洞に熱硬い男根はずん、ずんと雁太を押し込み、エリカに肥大な物量を体感させた。

「はああ……くう、う……んふう！」

ずぶり、と奥まで嵌まるとペニスの形がよくわかる。さながら焼け鉄を挿入されたのではと思うほど熱くて、芯は硬い。

接合部から泡がぶくぶくと漏れて入り口を潤滑させる。エリカ本人は望まざとも、過剰な興奮状態にある肉体は挿入の心地よさに屈服し、飢えた野良犬の涎のごとく、壺口から濁ったラブリュースを滴らせた。

端正な美貌は淫欲に染まり、眉も頬も緩んで顔つきを引き締めることができな。歯を見せる口の中では舌が、勝手にのたくり、唾液の溜め池をかき混ぜる。

「ひはあっ、あ……ぬ、抜いて……あっ、んああッ？」

ごりごり、と肉厚の亀頭冠で性粘膜を穿られた。強姦犯は美女のよく張った尻頬に両手をついて、続けざまに腰を押し戻す。

「んふあはあ！」

巨根が一回のピストンに恐ろしく幅を持たせ、肉襞を攪拌する。粘膜は物量で薄く引き伸ばされ、雁太によって三百六十度を余すことなく擦られた。

暴れる快樂電流が性感帯に熱痺をばらまく。

「ひあつふ！ はあ、んああ！ と……止まって、あつ、んくあ！」

怒張は荒々しく子宮孔を殴りつけ、女の中樞を直撃する。全身が燃え上がるかのように過熱して、粘性の汗をだらだらと流し、跳ね上がる鼓動は呼吸を苦しませた。

汗を吸ったライダースーツの吸着力が強くなる。腰をくねらせれば、尻の谷間に布地がぐい、ぐいと振れ込んでくる。

衣服の締め付けから唯一解放された白乳は、男の手を振り払って大きく揺れ弾み、桜色の乳頭で小円を描いた。ボールを胸でドリブルするかのような感覚だ。

「あうつふう、ぐ！ あつ、んひやあ！」

踏ん張ろうにも踵が着かず、吊り革と車体の揺れがピストンに反動を持たせる。男根は正確にPスポットを狙い当て、エリカに法悦を味わせた。

ズチャ！ グチャッ、ヌチャ、グチャッ！

連続する粘音に同調し、男どもも手淫の速度をあげる。傍にいる者は、エリカの肢体に

執拗で粘着質な手を運びながら、もう一方の手で逸物を扱っていた。

ハア！ ハア！ ハア！ ハア！

牡の唸る声があちこちで聴こえる。すでに果てた者がいるのかもしれない、濃度を増した腐臭が漂う。淫猥な雰囲気にも五感を蝕まれて頭がぼうつとする。

「っああん！ だめ……こ、こんな……あはあ！」

車窓を横に流れる景色がゆつくりと見え、時間と方向の感覚まで狂ってきた。

（わ……私、どうなって……？）

ついさっきまで何を考えていたのかが思い出せない。快美感をもたらす官能が脳に染み込んで、頭の中をとろとろにされてしまう。

この車両は日常社会から切り離され、背徳の空間と化していた。ここでは猥褻が当然とされ、エリカも異様なムードに呑まれていく。淫肉をぐちゃぐちゃにかき混ぜられ、快悦に脊髄を打たれては腰が跳ねた。

「ひはあ、はあつく！ うっ、あふう！」

悩ましげに身を振って後背立位に悶絶し、小首をのたうたせ、赤い髪を振りまわす。

ロングヘアは双乳の両脇にも流れて白い肌をくすぐった。

「そ……そんなにしちゃ、あつ！ んく、っんあ！」

男に触られるのとは別に、蟻が走りまわるような肌のこそばゆさにも身悶える。切れ長の瞳は意志の光を弱くして、赤く色づいた頬を一筋の涙で濡らした。

水中から顔を出すように息継ぎし、緩んだ唇からは涎の一塊を落とす。

「あつはあ！ ひはあ、も……もう、はあ、だめ……！」

唾液で汚れた双乳をぶるん、ぶるんと振り上げ、凄絶な生ファックに喘ぎ狂う。

強姦者も息を乱して速度をあげ、エリカは踵どころか爪先まで床に届かなくなった。

「んふあはああ!？」

拘束部に全体重がかかって両腕が軋む。宙吊りになって揺れも激しくなる。

女の白濁を湧き立たせる秘壺は、肉唇を引きずって剛直をしゃぶり、粘膜をみっちり絡みつかせた。渦巻くように窄まって侵入者を苛烈に食い締め、男を味わい尽くす。

グチャツヌチャツ！ グチャツヌチャツ！

ペニスと摩擦を交換し、筒状の性感帯を過熱させていく。堪えようのない悦痺れが脊髓を抜けて全身を駆け巡り、脳裏で白い火花を散らした。

「んああつ！ ひは、イ……イク、もお……んはああ……ッ！」

頭の中が真っ白に染まり、列車の進行に置き去りにされたかのように重心のバランスがふわりと浮く。一拍の間に牝穴が収斂し、女探偵の肉体は臨界に達した。

「あふあはああああああああああ——！」

恍惚感に頭蓋を打ち上げられる。仰向いて絶叫し、この瞬間だけはオーガズムに屈して瞳をとろんとさせる。

緊縮するヴァギナが肉棒を呑み込みつつ、飛沫を散らした。



プシューウウウウウウウウウッ！

排尿同然の原始的な放出がもうひと押し of 快楽をもたらす。果てるエリカは肢体を伸びきらせて、激烈なバイブレーションを走らせ、蕩けそうな肉悦に陶然とした。

「あは……あ、んはああああ……ッ！」

周囲をぐるりと囲む男たちも絶頂に達し、とば口を続々と決壊させる。

ドビュッ！ ビュクンッ、ビュクビュクビュク！ ビュルビュルッ！ ビュルン！

ライダースーツ姿の美女に目掛けて無数の白弾が飛ぶ。男の年齢に関係なく、スペルマはどれも汚濁が濃く、糊のような粘性でびちゃびちゃと女体にへばりついた。

膣内の男根も拍動して欲望を注ぎ込む。

煮え滾った陵辱液ははだけた胸から腹部、股間を集中的に汚し、あたかもエリカが大量のカルピスを吐き出したかのような異様に彩られた。

ロングヘアは粘りを引いて、ぬめぬめと黒光るボディスーツに絡まる。白濁汁は時間をかけて、塊ごとにずると、美女のなめらかな曲線を垂れ落ちた。

噎せ返るような生臭さが充満するも、嫌悪感を通り越して「臭い」と感覚できない。心ならずもエリカは充足感を満喫してしまう。

「す……すごい、わ……あはあ……！」

車内で強姦され、汚い精液を身体じゅうに浴びせられたのに。オナニーよりも、恋人とのセックスよりも淫猥で、心地よく、甘美な陶酔感に半ば放心する。

騒々しい風が頬に当たり、深紅のストレートヘアを翻す。

(思いっきりド真中じゃないの……)

右を見ても左を見ても、人、人、人の好奇心旺盛な笑顔だらけ。わくわくとした期待は背中越しにも伝わってくる。万博の催し物と思われているのだろう。先行公開の来客にはやはり日本人が多く、海を眺める感覚で、黒髪だらけの一面を一望できた。

モデルさえ比較にならない美貌に、カメラマンは目を瞬かせ、レンズを通してエリカの横顔を覗き込む。自然体で揃えられた長睫毛と、切れ長の瞳、すらりと整った顔立ちに男も女も感嘆する。薄くリップを塗っただけでも、唇の潤いは十分だ。

「すっげえ美人……え？ 芸能人だっけ？」

光沢のある漆黒のライダースーツは、魅惑の熟れた肉体をびつたりと、首からくるぶしまで隙間なく包装していた。胸にはメロン大の肉果実を二個も詰め込んで、後ろでは、量感たっぷりなお尻の谷間に食い込んでいる。

ボディラインを強調する格好のせいか、曲線は流麗に引き締まり。衆人環視に多少は疎んだエリカが背を丸めても、上腕で胸の谷間を寄せる、誘惑のポーズになった。小さな指編みの仕草もかえって人目を惹く。

彩度の強いカレントレッドのロングヘアと、スーツの影とのコントラストは、抜群のファッションセンスを発揮し、高須賀エリカの存在感を強烈に印象付けた。

(歩いてて見られるのはしょっちゅうだけど……この数はないわ)

街でちらちらと目追いされることは日常茶飯事であって、普段は気にも留めないが、野外ステージの上で数百人に環視されては、探偵業の高須賀エリカに舞台経験などあるはずもなく、ひどく緊張させられる。

(こんなところで何させようっていうのよ？ 変態どもは……)

グローブの中は早くも汗ばんで、ブーツの硬い踵も落ち着かなかった。

『ステージに立つたな、オンナ。まずはジッパを、そうダナ、ヘソを見せろ』

精神に異常をきたしたテロリストを、下手に刺激するのはまずい。

「くっ……わ、わかったわ……」

今は従うふりをするしかない。美人探偵は背筋を伸ばし、できるだけ観客の顔を見ないように、薄い雲を眺めながら、ジッパを降ろした。

肉体を縦断する線が綻び、白い肌を覗かせる。スーツが黒いため、露出は観衆の遠目にも明らかだ。しかしまだ来客一同は、エリカの行動の意味に気付いていない。

『鈴木アナ、彼女は？』

「何か隠しているのかもしれませんがね。カメラさん、もう少し前に」

耳に近づく会話と、マスコミの遣り取りからして、生放送もされているらしい。

(サイアクだわ……)

内心では恥ずかしく思っ、ほの赤く頬を染めながらも、指示通り半分までジッパを外す。それからジャケットを両脇にのけ、たわわな乳果を揺らす。

柳腰に凹んだ、臍の縦筋に陽が差し掛かった。

(む……無理矢理やらされてるのよ。……誰が好き好んで)

さしもの強気な女探偵も、かつてない背徳感に身震いする。公衆の面前どころか、名のあるテレビ局の報道陣に囲まれての脱衣である。

ライダースーツが左右に少しだけ割れて、紫色の薄生地を覗かせた。

鼓動と呼吸が密かに速くなる。屋外では夏でも滅多に素肌を見せることのないエリカにとつて、露出には、慣れない羞恥があつた。

ステージの正面にいた衆人が俄にざわつく。リポーターはぎくりと目を丸くした。

「なっ、なんででしょうか!? 女性が……」

『鈴木アナ? 現場の彼女がどうかしましたか?』

白昼堂々と野外で催される、ライダー美女のストリップ。ジッパーの緩んだスーツでは押さえられない肉釣り鐘が、ぷるんと跳ねるのを、ブラジャーに受け止められる。

化粧の下手なティーンエイジなど勝負にならない、健康的で清潔な白肌が、艶を帯びて照り返った。妖艶さに拍車をかける紫色のブラジャーは、花の模様で縁取られており、乳肉の重量そのものだけで、背中留め具が外れそうになる。

観衆からは好奇の視線を、ライダースーツと肌との隙間に差し込まれた。両手を手前で交差させ、ふくよかな巨乳を抱き上げる姿勢で硬直し、動くに動けない。

前方にまわり込んできた客も、堂々とした女の脱衣姿に驚く。

「はあ、はあ……こ、これでいいんでしょう？」

『まだダ。次はそこデ、ハア、小便をシロ』

心臓がきゅつと萎縮し、次の鼓動をはね上げた。怒り肩のごとく肩肘が強張り、背筋に冷やかなものを忍ばせる。マスコミの混ざった衆人環視のこの状況で、まさか、立派な成人女性が小便などできるはずがない。

（私は勝手にステージに立ってるのよ？ 警備員は何やってるの！）

警備員らしい服装の男女は複数いるが、あんぐりと口を開いたまま。想定外の出来事に思考が停滞しているようだ。むしろ女性リポーターのほうがまだ冷静である。

「彼女が脱ぎ……いえ、こ、これから何か始まるようです」

あくまで万博の催し物として、半信半疑ながらも、来客は一旦納得する。そのせいで次を、余計に切り出しにくくなってしまった。今この場で排泄をしようものなら、明日にはニュースで全国的に取り沙汰にされる変態だ。

（ここでオシッコしろ、だなんて……）

用を足す行為自体は至って単純だ。ジッパを最後まで降ろして、手探りでショーツをずらし、屈んで気張ればよいだけのこと。しかし精神的なブレーキが固すぎる。

『どうシタ？ 人質ガいるのヲ忘れルナよ、少シ痛メつけテヤロウか？』

「す、すぐ始めるわよ。ユイには手を出さないで」

それでもやるしかない。ただ、全裸同然まで脱ぎたくはなかった。

「服くらい着てても、いっ……いいでしょう？」

『……いイだろウ。さっさと小便を垂ラセ』

豊乳を両腕で抱き込んで、背筋を反らし、しなやかな脚を伸びきらせる。アンバランスな爪先は踵を浮かせ、ブーツの奥で親指を曲げた。

少しだけ股を開いて、ジッパラインをカメラに差し出し、胴震えする。

エリカは顔を初心な乙女のごとく赤らめて、白い歯を見せがちな唇に数回、酸素を吸い込んでから、きつく眉根を寄せた。そして膀胱を萎ませよう、とはするものの。

「あくっ、う……うううう……！」

どうしても理性が愚行を拒絶し、ひと押しの力を躊躇させる。背徳にあと一歩踏み出すのは難しかった。いくら人質を取られたうえで命令でも、できないことはある。

肉体も、排泄が必要なほど切羽詰まっているわけではない。

(んはあ……やっぱり無理よ、オシッコだなんて)

下唇から歯を離し、思い留まる。もし放尿を披露すれば、どうなるだろうか。

集まった群衆はきつとエリカを変質者だの、痴女だのと軽蔑して。つかず離れずの視線で自分を舐めまわすに違いない。

(たくさんの人に見られて、お、オシッコ……とか)

ところが、そのイメージがエリカの肉体に、ある種の興奮も呼び起こす。見られる羞恥ではなく、あえて見せる羞恥なら、満員電車の中で知った。

行為が変態的であればあるほど、人々を驚かせ、背徳感も増大する。

(……やだわ、さつきから何考えて)

頭に高熱を浮かばせ、だんだん身震いを止められなくなった。

「あつ？ あ、だめ……やだ、ちよつと！」

尿道に熱感が滲む。慌てて右手で股座を押さえるも、生地まで張りある太腿が勝手に八の字になり、筋を緩ませてしまう。

微弱な震えは脛脛ふくらはぎから膝の裏、お尻を抜けて背筋まで達し、脳のすぐ後ろに排尿の前兆を伝わらせた。一度始まった生理は、強迫的に理性の壁を殴り、本能を自由にさせる。

「だ、だめよ！ わつ私はまだ、ああく……いいいいッ！」

今さらとわかっていながら、遅すぎる抵抗で食い止めるが、昂る肉体は膀胱の中身を吐き出し始め。エリカは四肢を引き攣らせ、巨乳を持ち上げるように背をのけぞらせた。

観衆が押し黙って見守る中央で、水音が鳴り始める。失禁がこれから勢いを増すのを実感し、心ならずも気張らずにいられない、胸元のはだけたライダー美女。

「いいいつ出ちゃう！ オシッコ、おおっ、オシッコ出ひゃあううううう！」

ヂョロヂョロヂョロヂョロヂョロヂョロヂョロ——！

体温を上まわる熱水が出口を抜け出し、ショーツもろとも、ライダースーツの股底を蒸らしていく。光沢の鮮やかだった黒色がみるみる淀む。

浸透する小水は脚線を伝い落ち、薄生地を内股と太腿に粘着させた。

生まれた以上は禁じえない原始的な快楽を、肉体は味わうしかない。快美感に股間一帯を蕩けさせ、密着タイプのライダーズーツで、生温かい液体を残さず吸い上げる。

張り詰めていた表情が、一瞬弛緩し、瞳に牝の本性を秘めた。

「あああつ、あああ！ んふあああああ！」

まだまだ駆け抜けていく熱い快感。

何をしているのか、自覚があるからこそ、吹き荒ぶ羞恥に声のトーンをあげても。

「やああ……とつ、止まって！ オシッコ、とと、止めて！」

中断できず、禁断の放水を続けてしまう。粘性のエキスはスーツの裏面をぬるぬると徘徊し、失禁探偵の股座を舐め上げた。ウエスト以下の生地が濡れそぼって、エリカ本人にもお尻の形を感覚できる。ぎゅつと谷間に食い込むのはショーツだ。

むっちりとした太腿にも小水の膜がへばりつく。

「はあああつ、き……気持ち、悪い……！」

密封性の高いライダーズーツのために、体液は一滴も外に捨てられなかった。生地から肌へも染み渡り、開けた胸元からは、尿のにおいが立ち昇ってくる。

（うっ？ ウソよ、私……本当にやっちゃうなんて……）

独特の生臭さに鼻の奥を突き上げられ、涙腺に染みる。少量の涙で潤った瞳は、粘った下半身を見下ろしてから、前髪にさつと隠れ、恐る恐る周囲の静寂を窺った。

舞台女優の赤面と、漏水音、濡れすぎた股間。エリカの失禁を知ったらしい来客は変態



行為に啞然とし、リポーターはマイクを落とす。

「鈴木アナ? ……鈴木さん、どうかしましたか?」

「……え? ええと、その……」

スタッフの数人は慌てて放送を中断した。

ところが、各テレビ局のチーフスタッフは撮影の続行を命令する。

「何勝手に切つてんだ、カメラまわせ!」

「で、ですが……」

「馬鹿野郎! 事件性があるからこそ、撮つとく必要があるんだろが!」

さすがに生放送は中止になったかもしれないが、事件の記録として、尿漏れ姿をズームで撮影されてしまう。プロのカメラは女体曲線を、正確無比になぞり、ブラジャー一枚の巨乳をレンズに確保した。

(ちよつと、う……ウソでしょう……?)

右からも左からも、斜め後ろからも、複数のカメラが自分を睨んでいる。それ以上の数の目はなお痴女に釘付けだ。

「おいなんか、変なコトになつてきたんじゃないか? 万博なのに」

「イベントとか紛れ込んで、騒ぎ起こす……変態つてヤツ?」

軽蔑と疑惑の視線が針のように突き刺さる。それはスーツも肌もすり抜けて、エリカの心臓を貫通した。頬が俄に赤々と染まっていく。

「これは、ち……違うのよ？ 私は、その」

ブラジャーの胸と湿った股間、どちらを優先して隠すべきなのかわからず、混乱し、両手は柳腰をいやらしく徘徊するばかり。

最初こそステージ上の乱入者に目を輝かせもした観衆が、今は完全に、女探偵を変質者扱いだ。人目を憚るところか、見てもらうことが目的のような、オシッコと宣言までしての公開失禁。群集の中には顔を背けて、ひそひそと囁く者も多くいた。

(私、すごく変な女って思われてるんだわ……)

頭は羞恥で過熱し、弁解の言葉がひとつも思い浮かばない。羨望の対象にされることが日常的なエリカにとって、侮蔑されるのは耐え難い屈辱である。

(このままあいつらの好きになんて……いい、いつまでも！)

弱りかけた心を怒りで叱咤し、両腕で胸を抱きなおす。しかし上半身はともかく下半身は、自分の体液でずぶ濡れで。太腿を閉じようとすれば、ぬめぬめとした汁の流動感に絡みつかれて、どうしても動きが鈍った。

落ち着きの深呼吸も終えられないうちに、通信機から新たな指示を与えられる。

『……オンナ。マイクを拾エ。ステージの下に転がッてるヤツだ』

「え？ まい、く……マイクって、あ、あれのことかしら……」

尿の汁気と太腿で戯れながら、おもむろにステージを降りると、観衆にさっと距離を取られる。それでもカメラマンは撮影のため、一定の間合いまで詰めてきた。

ストリートヘアで足元を掃くように、エリカは前屈みになって、さっきのリポーターが落としたマイクを拾い取る。

『そうダ。ソレをオマエの、デカイ胸の間ニ突ッ込め』

S校で初体験した「パイズリ」の淫猥さが脳裏によぎる。機会があればもう一度、と乳首が疼くこともあった。

(また私、変なコト考えて……そ、そうよ、きっとグレムリンのせいだ)

苦し紛れの言い訳に内心、どこかほっとして、灼けた吐息を漏らす。言いなりになる悔しさこそあれども、蒸れすぎた胸の谷間を早く楽にしたかった。

(こんな変態みたいなこと、だけど……)

垂直に立てたコードレスのマイクを、乳谷にずぶずぶと、観衆全員の視線もろとも差し込んでいく。温もった肉体に金属製の拡声器は冷たい。

ところがその際、ブラジャーの合わせ目にマイクの柄尻が引っ掛かり、豊乳を覆う生地が剥がれた。下着を自力で脱ぎ捨てるかのように、裸乳が飛び出してしまふ。

「きゃっ!？」

特大、ともいえる大きさに、豊かな弾力と柔らかさを内包した白い乳塊は、出来立ての餅のごとく形を変え、谷間にマイクを呑み込んだ。

色素の薄い桜色のニップルを振りまわし、ブラジャーを下へとずり降ろす巨乳に、衆人の誰もが目を見張る。カメラマンたちは一歩、二歩と接近し、撮影も念入りになった。

両腕で咄嗟に隠した、丸裸の胸が熱い。

(ジャケットをもう少し寄せれば……無理だわ、やっぱりブラがないと)
緊迫感に鼓動はビートを奏で、呼吸を苦しめる。

「はあっ、はあ……んはあ」

息遣いはマイクで増幅され、会場全体に響き渡った。悩ましい牝の声は、エリカ本人の耳から頭に入り込んで、無限に反響し、少しずつ淫らな気分を盛り上げていく。

『そろそろ本番トいくカ。正面にカメラマンがイルだろウ』

「え、ええ……」

テロリストとの会話をマイクに拾われようと、誰も気に留めない。それよりもライダー美女の一挙手一投足、乳の揺れが注目度を高めていた。

『そいつのぺにすヲ啜え口。今すぐだ』

常識を逸脱しすぎた命令に、女探偵は固唾を呑む。

(……なんですって……?)

これだけの人数が見ている前で、見知らぬ男の逸物の世話をしろ、などと。あえて意識しないようにしていた男性の股間に、エリカの視線が反射する。

『どうシタ? できないなら、わかっテイルな?』

「も……もちろんよ。見てなさい」

膝立ちの姿勢で、せめてカメラの数の少ない方向を選び、進んでいく。痴女との接近に

正面のカメラマンは、あとずさったものの、エリカの手はベルトを的確に掴み取った。観衆は一斉に仰天し、無言で「アッ」と口を開く。

「なっ？　　なな、あんな何をする気だ？」

「はあ、い……いいからじっとして」

美女の放尿姿はどうも刺激が強すぎたらしい。カメラマンの股座は見るからに膨らんでおり、脱がさずとも、勃起の位置を把握できる。

(……とにかくチャンスを待つのよ、それまでは指示に従うしか……)

さきほどのシーンが放送済みなら、警察の誰かが、高須賀エリカの窮地に気付いてくれたかもしれない。警備員が動き始めている可能性もある。とすれば、今の自分にできることは、時間をできる限り稼ぐことだ。

生乳を注意深く左腕に抱えつつ、太腿をぴったりと閉じ合わせたら。まずはズボンの上から慎重に、男の部分を、尿濡れのグローブを嵌めた右手であやす。

「ちよつと待ってくれ、ち、チーフ！　助けてください！」

「おお、落ち着け！　カメラから目を離すな！」

うろたえながらもカメラマンは、至近距離でエリカの美貌を捉え、羞恥と当惑に満ちた顔色を撮り続けた。顔のアップだけでなく、手つきも、マイクを挟んだ胸の谷間も。

布の折り重なったチャックを広げて、手を突っ込む。折り返し抜き取れば、成人男性の猛々しい肉棒が食み出した。

(やだわ……この人の、もうこんなに……)

勃起の確信があったとはいえ、実際に目にとると、先刻の自分がいかに卑猥だったかを痛感させられる。異性に場所柄をわきまえることを許さず、性欲の本能を引きずり出してしまふ、自分自身のエロティシズムを。

すでに親指三本を束ねた太さに膨張し、エラより下の皮まで剥け始めている。赤黒い亀頭は緊張気味にひくひくとして、浮かび走る血管から欲望の血潮を集めていた。

「はあ、う、動かないで頂戴？」

エリカにそのつもりはなくとも。うわずる声と躊躇の震え、あくまで胸を隠そうとする仕草が、ただの痴女乱入には考えられない淫靡な雰囲気を作り出す。

騒ぎは次第に沈黙に変わり、全員が痴女の出方を待っていた。

(みんなが、あんなにじろじろ……)

奇異の視線と数台のカメラに晒されながら、エリカは茎胴まで肉塊を取り出して。湿り気のある右手でそれを慎重に、怯えさせないように握り締める。

グロープ越しにも、身体の一部とは思えない高温と硬さ、そして、生々しい脈動がてのひらに伝わってきた。握力から逃れようともがく姿は、まさしく生き物だ。

S校でペニスの大群に囲まれた経験のせいとか、前ほど反射的には嫌悪できない。(フェラチオ、だなんて汚いに決まってるけど……)

それよりも、弱点を弄ばれた時の、異性の反応を想像してしまう。ライター美女の指は

自然と動いて、人差し指から薬指までを太幹に巻きつけ、小指だけ立てた。

親指では裏筋を強めに圧迫し、とば口を上に向ける。

「はぁ、は……始めるわよ？　ン……あふう」

食物を摂取するわけでもないのに溜まった、生唾の沼から、一枚の舌が起き上がり、前歯の裏をひと舐めする。同時にエリカは、艶ある唇をアーンと拡げた。

舌尖から大粒の涎を零し、目的の亀頭に近づいていく。しかし距離を縮めるにつれ、接近は遅くなり、エリカも、おそらくは相手も焦らされた。

「いまから、はあっ、少しだけ……」

強制されたものであれ、自分から進めていく意志的なフェラチオだ。背徳行為は数台のカメラに後ろを取られ、もう引き返すことはできない。あと三センチの間合いから、十秒近い時間をかけて、ようやく舌を接触させる。

「あむっう、おもお……んふっあ」

初めて口にする牡の味は苦かった。けれども不味い、汚いとは感覚できない。

（これが……男の人の味？）

味の強いところを探し、求めて舌をうねらせる。歪な膨らみ方をする亀頭はどこも、摩擦にすこぶる弱く、持ち主の男が息を乱した。

「チーフ？　ハア、ま……まだ撮影の必要が、あっ、ありま……っはあ！」

とても撮影どころではなく、カメラがぶれる。代わりに他のカメラが、両隣の低い位置

にまわり込んで、口淫美女のすべてを収録した。左右のどちらに瞳を寄せても、レンズには自分のはしたない横顔が映っている。

(あれが私……?)

もっと嫌がって、顰め面にでもなっているはずと思っていた。なのに実際は、眉根を離して虚脱し、潤んだ瞳はうっとりとか何かに見惚れている。必要以上に開いた朱唇は、両端から涎の筋を伸ばし、旺盛な食欲を抑えきれない。

「んあつふ、むちゅ? はあつら、おむ……」

舐めるにしては舌を返す回数が多く、唾液の分泌量も異常だ。さきほどの小水のごとく口蜜が溢れ、溺れそうになる。

相手の股座から跳ね返ってくる唾液臭は、だんだんと青臭くなり、エリカの頭に危険な酔いをもたらす。裸乳を隠すのに精一杯だった左腕は、いつの間にか剥がれ落ち、湿った太腿をさすっていた。

口淫と呼吸の同時進行で苦しい肺が、膨縮し、汗だくの巨乳を重そうに揺らす。

「んぷはあつ、はあ、はあ……おおろ、おおひく、おぐ……なつれひたわ」

フェラチオで使うのはせいぜい舌と唇だけ、のつもりでも、エリカの豊満な肉体は、躍動的に弾んでしまう。あたかも撮影のためであるかのように、よく腰をくねらせ、左手はカメラを導くように女体曲線をなぞり上げた。

表情を隠すには都合のよいロングヘアを、無意識にかきあげ、背中へと流す。

チュパッ、チュルチュル……チュパ！ ズルズルズルズル！

乳谷にあるマイクは吸い音を残さず回収し、来客全員に大音量で聴かせた。あまりの音の卑猥さに、耳を塞ぐ者も多数おり、観衆がどよめく。

「おい、あの女……本当にやってんぞ？」

「誰か止めなくていいの？ け、警備の人とか」

居合わせた全員の反応を独り占めしてしまえる、倒錯した優越感が、どこからともなくエリカに誘いを投げかけた。

（こんなところ、私、カメラにまで撮られちゃって……）

自分を見て、誰とも知らない大勢の人間が驚いている。男は興奮している。熱っぽい頭はぼうつとし、探偵お得意の論理思考は毎回、猥音に遮られた。

ライダースーツから取り出した巨乳を放置して、フェラチオ奉仕に精を出し、完全に勃起に仕上げたペニスを、ついには深めに咥え込む。

「んむおおっ、むぐおお！」

窄まる唇がエラを越え、赤剥けた雁首に吸いついた。男性カメラマンが尻込みしようとは構わず、前のめりになって追跡し、生乳をぶらさげる。

ウエストより上ははだけていても、汗濡れのせいで蒸し暑い。尿水は股間を前から後ろにくぐり、肉感的な太腿を満遍なく侵食する。

「……むぢゅ！ はあっも、おおぐ、んあぢうう」

頬張るまでで呑み込むことはしないし、できもしない不思議な食感だ。肉柱は太くて歯を立てられず、張り出たエラに、唇を裏返させられそうになる。

(これが……フェラチ、オ……)

もしかしたら単純なセックスよりよほどの猥褻かもしれない。赤子の指しゃぶりに似た粘音は、すぐ傍で連続し、快感にのたうつ怒張に、口蓋を何度も叩かれた。

「はおぢゆうっ！ んもおっ、おご！ むふうおお？」

肉棒の味は口内粘膜に染みて、ほろ苦く、刺激臭となつて鼻の奥にも昇ってくる。亀頭を舌より奥に吸い込んだエリカは、雁首から幹胴にかけて唇を運び、首も駆使してロングヘアを波打させた。

ヂュポッ！ ズボッ、ヂュポ！ ギュポ、ズボッ！

輪郭のすらりとしていた頬が歪む。狭い空間で舌と、ペニスの大瘤が戯れ、粘膜の熱を共有する。相手カメラマンは口淫美女のアップを捉えたまま、腰をぶるつと震わせ、すでに射精寸前と変わらない発作に陥っていた。

「ハアハア、ハア！ ッハア！ チーフ、俺、こっ、これ以上は！」

剥き出しの性感帯を優しく舐め、男根の芯を強めに扱き抜く絶妙なテクニクだけではない。衆人環視の羞恥とプレッシャーに相手まで巻き込んで、昂らせていく。

エリカの肉体も尿とは別の、熱い発情汁を滲ませていた。

(やだ私、こんなことして……濡れてるわ)

自分が変態である決定的な証拠のエキス。尿漏れとは違って少量ずつ、持続して、下に穿いたショーツを濡らす。

脇腹を這い上がって生乳の麓を按摩していた左手は、見えない糸に操られるかのように指をほぐし、残りのジッパーを降ろしていった。

「あぐう、おっ、むふ！ んもおお！」

テロリストに命令されたわけではないのに。ライダースーツの合わせ目を全開にし、汗みずくの肉体を前面だけ照り返らせる。ブラジャーと同じ紫色のショーツは、下着にするには面積が少なく、中央のレースに性毛が透けていた。

触らずとも乳頭がしこり、秘裂に埋まった肉豆も疼く。スーツのせいで慰められない肌のこそばゆさが、その三点に集中し、エリカの意識を引っ張りあう。

気持ちよさそうな男の赤面に、つい一声かけてしまった。

「……んぷはあっ！ はあ、ひはあ……ろお？ 私の……ふえ、ふえらひお」

貪欲な唇から抜き取られた肉茎は、ぬめ光るくらいにどろどろだ。通常の唾液よりも粘度が強く、美女の舌先から零れる玉の雫も、糸になるまで伸びていく。それが裸乳に絡むのを、拭おうともせず、右手で剛直の向きを固定し、舌を這わせる。

カメラの位置をすべて無意識のうちに把握したエリカは、いやらしい目つきでレンズを覗き込み、艶笑を深めた。

（だめだわ……なんだか、とめられない……カラダが熱くって）

直接的な刺激で感じさせられずとも、性的興奮が込み上げてくる。観衆の注目を自分の肉体でこそ独占し、女体曲線に視線の徘徊を許す、背徳の羞恥。当たり前前の恥ずかしさが行きすぎて、制御できなくなり、見せる快感を自ら刻み込んでしまう。

「違ふのよ？ ふあ、私、はお……んむああ！」

否定の言葉の途中であろうと、堪えきれない震えを優先し、切ないまなざしに悦びと恥辱の涙を溜める。牝一匹の艶姿が醸し出す濃厚な淫気は、無用心に近づく男性の下半身を引き寄せ、エリカは、空いた左手で次々と他の獲物を裸にした。

（おっきいのが……たくさん、はあ、私を見てるわ）

ベルトを緩めてチャックを開く、一連の動きは手品のように素早く、カメラマンたちには見えても、遠巻きの衆人にはわからない。成人男性の逸物は、解放されただけで鎌首をもたげ、鈴口に牡蜜を先走らせる。

中央の一本を十分に温めた女探偵は、受け皿にした両手に大量の涎を蓄えてから、双乳の揺れる方向にある、別の二本を掴み取った。

「私は、し……しなくちゃ、っはあ、いけないの……だから、んふああ」

そして男性手淫の要領で、茎胴を苛烈に扱く。本来の握力は、皮製のグローブによって強められ、男の硬さに負けなかった。

滴る舌では同時に、正面の肉太を滑り落ち、改めて裏筋を上になぞり上げる。

「んちゅっ、はむ……んもっお、おご、むうおおお」

さきほどよりも膨らんだ雁太を、容積ぎりぎりにもかかわらず頬張り、唇との合わせ目に白濁を湧き立たせる。観衆のざわめきなど、思考もろとも遠のいていった。

(さっきから……私、何して……)

淫蕩のムードが脳裏に立ち込め、行為の理由を忘却させる。望むと望むまいと、肉体は奉仕を続行するしかなく、そうしなければ、逆にどうにかなくなってしまいたい。

チュパチュパッ！　ヂュル！　ズルズルズル、ヂュルヂュル、ヂュパッ！

「あむおも！　あおもぐつ、ンぢゅつ！」

涎を垂らして、巨乳を液浸し、正直な牝の肉体を火照らせていく。

フェラチオがこれほど心地よいとは思わなかった。

(無理よ、こんな変な、気分になつたら……)

ただでさえ衆人環視の真中で、男の部分の文字通り「味わい尽くす」、実際は女性本位の奉仕プレイだ。窄めた唇で吸引力を増幅し、尿道の中身を引きずり出す。

「んあつふあ！　はあ、どお？　はあつく、まはなの？」

休まず舌を巡回させ、爆発寸前の亀頭に、過剰な刺激を与える。両手首はスナップを利かせて、完全勃起の包皮を無理矢理にでも剥き戻し、男たちを苦悶させた。

「ハアハア！　でっ出る！　俺もう、俺ッ！」

「そんな激しく、ハア！　これ以上は、ハアッ、ガマンできない！」

我慢など許さない。むしろ一番に感じ、淫欲に耽っているのはエリカであって、口淫も

手淫もスパートに入った。

まるでオナニーでもしているかのように、背筋がぞくぞくとし、肉穴を潤わせる。唾液も愛蜜も同量になり、秘裂はショーツを挟み込む。

「っあふうん！ あおつも、わはひも、わらひもイク、もおいきそうなの！」

膝立ちの姿勢だったエリカは、爪先で踏ん張るM字開脚のポーズに変えて、髪と空腰を波打たせ、太腿を最大限に弾ませた。巨乳を振り上げた反動で、男の股座へと濡れ唇を突進させ、溢れた涎を押し運ぶ。

ヂュポッヂュポッヂュポッ！ チュポヂュポヂュポヂュポ！

胸の谷間に入り込んだマイクは、会場全体に猥音を響かせた。男性が女性を襲うのではなく、女性が男性の急所を食い荒らす逆の構図に、誰ひとりとして声を出せない。咀嚼音はいっそう大きくなって、加速もする。

「もおイクっんぢゅ！ はむぢゅ、あむっ、おおむ！ ンぐ！」

高須賀エリカは、自分で作り出した淫靡な雰囲気呑み込まれて、頭の中をとろとろに溶かしていた。見られる羞恥を裏返した、見せる興奮に高揚し、背後のカメラに量感あるお尻をぶつける。

全身をあますことなく使った、それこそ、逸物を本当に食べるかのような肉食のダンスで、カメラマンたちの下半身を虜にする。

「はあっぐ、ひぐ、いっく！ んちゅぱっ、はあっぶ、んあっあ！」

両手でも肉竿を扱きつつ、貪欲な唇は口内粘膜で雁太を食い締めた。脳裏を空洞にくり抜かれ、官能の奔流が通過するのを許してしまう。

「びりつれきへる、おおっオッパイも、あおごも……！」

肌に群がる甘いざわめきが、性感帯の三点に集中し、疼きを漲らせる。

細腰がお尻ごと浮き上がり、快感に脊髄を打たれた。

「んぶあはああああああああああああああ——！」

涎の糸を引き千切るようにしゃくりあげ、開放的な空を仰いでいなく。衆人環視の緊迫感など、肉体の臨界の前では紙のごとく破れて、エクスタシーへと導かれる。

好物はチンチンの変態女が、縮まりの悪い尿口から潮を噴いた。

プシャアアアアアアアアアア！

ライダースーツを綻ばせた美女に目掛けて、肉砲が欲望を放つ。人前とはいえ、正直なペニスとは口から汚濁を漏出させ、十数本の放物線でエリカに網をかけた。

ドビュドビュドビュ！ ビュクビュク！ ビュルビュルビュルビュル！

カルピス原液を煮たような腐粘液が、女探偵のアクメ顔に着弾する。女性にはまず体液であることが信じられない、粘性白濁のスペルマは、稀有な美貌を台無しに汚した。前髪を額に貼りつかせて、鼻筋の左右に分かれて流れ、頬にも伝う。

「あむふっ、はあ、あはああああ……！」

大きく開いた唇にも弾丸を打ち込まれ、咽にべったりと絡みつく。粘り気が強すぎて食



道に落とせず、呑むに呑めない。丸裸の巨乳にも浴びせられ、尿を上まわる生臭さを、以後エリカの鼻先に立ち昇らせた。

なのに嫌悪感はなく、むしろ高級なワインの香りに思えてしまう。
(くさい、のに……なんてにおいな……?)

艶笑は恍惚として、飽きもせず舌なめずり。呼吸も忘れてエリカは、新鮮な性器臭を堪能し、満足そうに瞳をとろんとさせた。

あまりの出来事に観衆は、呆然として、痴女が倒れるのを待つ。数十秒も続いた痙攣の後、エリカの肉体はかくんと虚脱し、恥汗にまみれて突っ伏した。

その姿も複数のカメラに撮影される。

「ハア、ハアッ……チーフ？　こ、この女性は……」

「あ？　……い、いや待て、まだ何かあるぞ」

ステージの上にもうひとり、同じ格好の少女が現れ、またも観衆はたじろいだ。忘れかけていた通信機からは男の声が、掠れて聴こえる。

『まだマだ、ダ。オマエの弟モ参加させテヤル。ハア、犯させテみる』

「なん……の、こと……？」

「エリカ先輩、しっかりしてください！　あたしです！」

視界にうつすらと見慣れた顔が入ってくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>